

青藍会会報

第107号

令和8年6月



徳島大学医学部医学科同窓会

徳島大学大学院医歯薬学研究部形成外科学分野
教授 橋 本 一 郎

夢

橋本一郎



真昼のお月さま （撮影地：鳴門市）

撮影 山 根 伸 太（医学部23期）

青藍会総会開催のご案内

日 時： 令和8年7月20日(月)海の日 10時30分～16時00分

場 所： ハイブリッド開催（青藍会館大会議室・Zoomによるリモート）

- 1 議 事（10:30～12:30） 終了後 集合写真撮影
- 2 昼休憩（12:35～13:20）
- 3 青藍会MD-PhD奨励金の授与（13:20～）
- 4 2025年度青藍会賞の発表及び授与（13:30～）
- 5 2025年度青藍会賞受賞講演（13:40～14:20 質疑応答含む）



佐々木 雄太郎 先生（医学部56期）

徳島大学病院外科（泌尿器科）助教

演題「安全なロボット支援手術の実現を目指した新規手技および医療機器の開発」

座長 古 川 順 也 先生

- 6 学術講演（14:30～16:00 1人40分 質疑応答含む）

大 林 茂 先生（医学部39期）

埼玉医科大学総合医療センターリハビリテーション科教授

演題「脳に魅せられて」

座長 松 浦 哲 也 先生

岡 本 康 裕 先生（医学部36期）

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科小児科学分野教授

演題「少子化と小児医療の変遷」

座長 田 中 克 哉 先生

会場へお越しいただける方は6月26日(金)までに会報送付時に同封の「出席ハガキ」にてご連絡をお願いいたします（ご欠席の方は返信不要です）
昼休憩では「お弁当」をご準備いたしております

リモートでの参加をご希望の方はメールにてご連絡をお願いいたします

青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp

「丙午」雑感

愛媛支部長

河 崎 秀 樹 (医学部26期)

今年の干支は「丙午」ですが、御多分に洩れず国内では年明け早々に寝耳に水の衆議院解散総選挙で勢力図が一変しました。また海外では某超大国の老大統領の無節操な傲慢パワープレーで世界秩序が破壊され、大荒れの落ち着かない一年となっています。

私は仕事柄、毎月多数のレセプトを審査、チェックする立場にあります。高額薬剤や高額検査の増加で請求点数は増えているにもかかわらず、昨今の医療機関の収支は目を覆いたくなる状況で、愛媛県内でもほぼすべての自治体病院、公立病院が赤字に陥っています。COVID-19が猛威を振るっていた時期は補助金のお陰で黒字を確保していましたが、補助金が終了し長年のデフレ経済からインフレ経済へと転換したことも相まって収支は急速に悪化しています。

今年は診療報酬の本体部分が約3%引き上げになりましたが、大部分は職員給与の引き上げに充当されるため多くの医療機関にとっては焼け石に水でしょう。今回の優遇策が特定機能病院などの大病院に傾斜配分され、地方の中小公立病院への恩恵は限られたものになっています。また「物価対応料」が新設されましたが、2年に1回の診療報酬改定ではなく、毎年の物価上昇率にスライドさせるような柔軟で継続的な対応が望まれます。年間48兆円に膨れ上がった国民医療費はいったいどこに消えているのでしょうか。医療機関が悲鳴を上げる一方で、巨額の利益を上げているのは製薬会社や医療機器製造販売会社という現状はやるせないものがあります。

少子高齢化や人口減少の中、愛媛県でも2040年に向けた地域医療構想の検討がスタートしていますが、2025年を見据えた前回の地域医療構想では、「総論賛成・各論反対」で残念ながら実効性のある結論には至りませんでした。医師の地域や診療科の偏在に関する問題も以前からことあるごとに議論されますが、いまだ方向性は定まっていません。ほとんど左様に医療界を取り巻く環境にはなかなか光明が見えないのが現実で、医師が魅力ある職業に思えないのか一部では受験生の医学部離れが起き始めています。改革に大なたを振るうのに残された時間はそう長くはありません。「失われた30年」の間に、ある意味で患者を甘やかし、医療関係者の善意と犠牲の上に胡坐をかいてきた行政の責任は大きいといえます。タイミングや対応策を誤ると国民皆保険の崩壊、医療機関の大量閉鎖による医療難民の急増など、考えたくもない事態に陥りそうです。

暗い話ばかりいたしましたが、老医師の繰り言とお許してください。しかし忘れてはならないのは、医師の本来の使命は自分の技量を磨き上げて患者の生命を救うことにあります。あくまでもその本質だけは見失うことなく、予見困難な時代にも右往左往することなく「泰然自若」のスタンスで臨みたいものです。

目次

○題 字	橋 本 一 郎	
○写 真	山 根 伸 太	
○青藍会総会開催のご案内		
○巻 頭 言	河 崎 秀 樹	
○三上靖夫先生が明治国際医療大学学長にご就任	三 上 靖 夫	1
○橋本一郎先生が第69回日本形成外科学会総会・学術集会会長にご就任	橋 本 一 郎	3
○青藍会の助成活動		
青藍会スポーツ奨励賞の授与		4
青藍会奨励賞の授与		6
徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付	大 藤 純	7
○青 藍 会 賞 募 集		8
○医学科学生（総代副総代）との懇談会を開催しました		9
○新 入 生 歓 迎 会		10
○支 部 紹 介		14
○支 部 だ よ り		
北 海 道 支 部	前 田 信 彦	16
東 京 支 部	伊 藤 滋 朗	16
近 畿 支 部	播 村 佳 昭	18
兵 庫 支 部	小 川 達 司	18
岡 山 支 部	浦 上 淳	20
広 島 支 部	北 野 弘 之	21
愛 媛 支 部	原 田 雅 光	22
○会 員 通 信		
続・ドタバタ	渡 辺 圀 武	24
午年ランナー ―小豆島を奔る―	太 田 房 雄	25
恩師三好和夫先生の教え	近 藤 彰	26
全人的医療・心身医学に共通する因子	板 東 浩	27
昭和41年度卒業生第12期生、同窓会（よい会）報告	小 川 紘 一	28
13期生同窓会報告	野 中 家 久	29
医学部第14期生の同窓会（43会）開催報告	塩 田 洋	30
16期生同窓会	桜 井 え つ	31
令和7年度青藍会香川支部丸亀部会総会の報告	石 田 孝 敏	32
第22回同窓会、そして徳島の地域医療	本 田 壮 一	33
31期同窓会の報告	高 橋 安 毅	34
医学部第33期卒業生の同窓会開催報告	中 野 俊 次	34
医学部 around40期同窓会を開催しました	山 田 博 胤	36
同窓に還るとき	西 村 直 樹	37
医学部第46期卒業生同窓会開催報告	沼 田 周 助	39
故・森口博基先生との思い出	板 東 浩	39
川尻宏昭先生を偲んで	山 田 博 胤	41
俳 句	雫 俊 一・真 鍋 正 広・駒 木 幹 正	44
○書 籍 紹 介		
精神科臨床リポート 精神分析理論が活かした8つの事例	小 林 和	45
見逃される高血圧の合併症	坂 東 正 章	46

○徳島大学の動き

徳島大学大学院医歯薬学研究部長就任挨拶	西岡安彦	47
徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退職教授挨拶	米村重信	48
	赤池雅史	48
	高山哲治	49
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介	臨床神経科学分野 松井尚子	50
	生理学分野 吉田盛史	51
徳島大学病院新任教授紹介	地域外科診療部 徳永卓哉	52
○第59回全日本医科学生体育大会王座決定戦の結果	ゴルフ部 竹林瑚乃香	53
○徳島大学大学院医学研究科 MD-PhD コース修了	立花尚太郎	54
○徳島大学 MD-PhD コース同窓会活動報告	荻野広和	55
○青藍会学生広報委員紹介	直江陽香	56
	太田菜々香	56

○青藍会の動き

青藍会出身教授一覧		57
教授就任挨拶	自治医科大学附属さいたま医療センター周産期科新生児部門 須賀健一	58
	高知学園大学健康科学部臨床検査学科 阿部孝典	59
医学部72期卒業生（令和8年3月卒業）		60
会員の異動		61
物故者		62
青藍会会費納入状況		63
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い		64
事務局からのお願い		65
○投稿規定		66
○第43回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ		67
○編集後記	板東浩	

★支部総会開催のお知らせ

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください

香川支部総会	令和8年6月27日（土）18時	レクザムホール（香川県県民ホール）
近畿支部総会	令和8年7月11日（土）17時	ホテルグランヴィア大阪
高知支部総会	令和8年9月5日（土）16時	高知会館
岡山支部総会	令和9年2月13日（土）18時	

最新の情報につきましては青藍会ホームページをご覧ください。→



支部総会開催のお日にちが確定しましたら青藍会事務局までお知らせください。

三上靖夫先生が明治国際医療大学学長にご就任

明治国際医療大学学長就任にあたって

明治国際医療大学学長

三 上 靖 夫（医学部31期）



このたび、青藍会の皆様にご挨拶申し上げる機会を賜り、誠に光栄に存じます。

本年3月31日をもちまして、教員として23年半勤めた京都府立医科大学を定年退職し、4月1日付で明治国際医療大学に第10代学長として迎えていただきました。本学は京都府の中央に位置する南丹市にあり、徳島大学蔵本キャンパス（約16万㎡）よりやや広い、約18万㎡に及ぶキャンパスを有しています。豊かな自然に囲まれた環境の中に、校舎や最先端の学習・研究施設、附属病院が配置され、学びと実践の双方を支える環境が整備されているほか、充実したスポーツ施設も備えています。大学の門前にはJR

山陰本線が通っており、本学の旧名称を冠した「鍼灸大学前駅」があります。

本学の母体である学校法人明治東洋医学院は、2025年に創立100周年を迎えました。1978年にこの地に明治鍼灸短期大学が開学し、5年後には我が国初の4年制鍼灸大学（明治鍼灸大学）へと発展しました。2008年には明治国際医療大学へと改称し、現在に至っています。鍼灸学部（鍼灸学科）、保健医療学部（柔道整復学科、救急救命学科）、看護学部（看護学科）の3学部4学科に加え、大学院（鍼灸学研究科、保健医療学研究科）が設置されており、学生定員は1026名です。キャンパス内には、学科ごとに校舎が整備されています。附属病院は京都府立医科大学の関連病院であり、107床（一般23床、地域包括ケア37床、障害者47床）を有し、学生教育の重要な場ともなっています。

少子化が進む中、地方に位置する私立大学にとって学生確保は極めて大きな課題です。本学も例外ではなく、「選ばれる大学」であるための明確な特色が求められています。その一つとして、本学では「スポーツを継続しながら国家資格を取得できる大学」を掲げ、スポーツ強化クラブの整備に取り組んでいます。なかでも女子柔道部は、昨年の全日本学生大会において準優勝という優れた成績を収め、さらに派遣された国際大会でも優勝者を次々に輩出するなど、世界の舞台でも成果を挙げています。競技力の向上と学業の両立という容易ではない課題に挑戦する学生たちの姿に、大きな可能性を感じています。私自身、これまで柔道に関わってきた者として、今後さらに全国、そして世界の舞台で活躍する選手が育っていくことを大いに期待しています。

大きな動きとして、現在農学部を設置を申請中であり、2027年度から学生を受け入れる準備をしています。食農エコロジー学科（仮称）を設置し、有機農業分野で活躍する人材の育成を目指しており、新たな校舎の建設を進めています。本学が建学の精神として掲げる三つの和のうち、「人と自然の和」にも合致する学びであり、医食同源の視点から既存学科との連携も深めていきたいと考えています。

※※※ 三上靖夫先生が明治国際医療大学学長にご就任 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

着任早々の入学式の式辞では、新入生に「学者如登山」を引用し、「学ぶ」ということについて話をしました。「学者如登山」は、徳島大学初代学長・中田篤郎先生を顕彰する蔵本キャンパス内の碑に刻まれている言葉です。徳島大学で過ごした日々は、私の原点であり続けています。青藍会の一員としてのつながりを大切にしつつ、新たな職務に全力で取り組み、微力ながら社会に貢献してまいります。

青藍会のますますのご発展と、会員の皆様のご健勝・ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

略 歷

1985年 徳島大学医学部医学科卒業

1985年 京都府立医科大学附属病院整形外科勤務

2005年 京都府立医科大学大学院運動器機能再生外科学（整形外科）講師

2013年 京都府立医科大学大学院運動器機能再生外科学（整形外科）准教授

2014年 京都府立医科大学大学院リハビリテーション医学病院教授

2019年 京都府立医科大学大学院リハビリテーション医学教授

2022年 徳島大学医学部客員教授

2026年 明治国際医療大学学長

京都府立医科大学名誉教授

(現在に至る)



明治国際医療大学キャンパス

橋本一郎先生が第69回日本形成外科学会総会・学術集会会長にご就任

第69回日本形成外科学会総会・学術集会を開催して

徳島大学形成外科学教室

橋 本 一 郎（医学部34期）



2026年4月22日から24日の3日間、あわぎんホール、ホテルクレメント徳島、そしてザ・グランドパレス徳島を会場として、徳島大学形成外科学教室が第69回日本形成外科学会総会・学術集会を開催いたしました。日本形成外科学会の会員数は5900名を超えて6000名に近づいています。今回の総会学術集会では参加登録数は3000名を超えており、目標とする数の会員に登録していただきました。魅力ある演題を応募していただいたおかげで有意義な学術集会になったと考えています。会員のみなさまには、この誌面を借りて心からの感謝を述べさせていただきます。

今回の総会のテーマは、「新しい渦がうまれる場所 とくしまへ」といたしました。形成外科分野のロボット手術や日本ではまだ行われていない形成外科的片頭痛手術に関して海外から演者を招聘いたしました。現在、徳島大学形成外科学教室と tissue engineering に関して共同研究を行っているテクニオン・イスラエル工科大学の Levenberg 教授には、最新の研究成果について講演を行なっていただきました。私の留学先のボスであった Morrison メルボルン大学名誉教授による形成外科に関する哲学的で歴史的な講演を拝聴し、その司会を波利井清紀東京大学名誉教授に担当していただきました。Morrison 先生と波利井先生はともに顕微鏡下手術による遊離組織移植術の臨床応用を牽引した世界的レジェンドであり、この先でも語り継がれる共演になったのではないかと思います。また私は現在、日本形成外科学会理事長も拝命しており、本学術集会では理事長講演「新しい渦がうまれる場所：アピアランス・サージャリー」として、形成外科と美容外科のあり方に関する提言を行いました。多くの会員のみなさまのご尽力により「新しい渦」が沢山できたのではないかと自負しております。さらに会期中にはモンゴル形成外科学会と日本形成外科学会との初の懇談会として昼食会が行われ、将来の両学会の連携に向けて第一歩が踏み出されました。

また、会員のみなさまには徳島を感じていただきたいと考えて、さまざまな催しを企画しました。会長招宴では名誉会員、特別会員、評議員を大塚国際美術館にお招きして、学術集会が始まる前のひとときを楽しんでいただきました。総合会員懇親会はあわぎんホールに隣接するご成婚広場で野外開催いたしました。小雨でしたが、医学部医科栄養学科の学生による素晴らしい阿波おどりを一同が堪能し、会員も参加した輪踊りで盛り上がりました。懇親会の最後には主に形成外科教授で構成されたバンド演奏が行われ、会場がひときわ賑わいました。学会期間中はひょうたん島クルーズが無料で運行され、あわぎんホール裏の船着場から多くの会員に乗船していただきました。

理事会と評議員会が行われた学術集会前日には羽田空港発の JAL 便のほとんどが欠航したり、雨で総合会員懇親会開催が危ぶまれたりとさまざまな事態が起きましたが、学術集会が無事に終了した現在では良い思い出となっています。運営事務局、事務局長の安倍吉郎准教授をはじめとする医局関係者、そして何と言っても素晴らしい発表、司会進行を行っていただきました会員のみなさまに改めて深謝を申し上げます。



青藍会の助成活動

青藍会スポーツ奨励賞の授与

青藍会スポーツ奨励賞は、医学科学生に対して積極的に支援し青藍会に対する認識を深めてもらうため、西日本医科学生総合体育大会及び全日本医科学生総合体育大会などにおいて優勝、準優勝した団体及び個人に授与することとし、令和2年5月15日開催の役員会にて承認されました。

令和7年度は当該クラブ及び学生に授与しました。

青藍会スポーツ奨励賞を受賞して

剣道部（西医体団体優勝・西医体個人優勝）

主将 橋 本 青 空（医学科2年）

この度は、私たちにこのような貴重な機会を賜り、誠にありがとうございます。今後も徳島大学医歯薬学部剣道部は、徳島大学の学生としての誇りと責任を胸に、全力で活動してまいります。改めまして、心より御礼申し上げます。



剣道部（西医体個人準優勝）

片 岡 俊 人（医学科6年）

この度は、名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。集大成となる最終学年にこのような結果を残すことができ、大変嬉しく思います。支えてくださった方々への感謝と、剣道部での貴重な経験を胸に、今後とも精進して参ります。ありがとうございました。

水上競技部（西医体200m個人メドレー 2位）

吉 田 恵（医学科2年）

この度は、このような素晴らしい賞をいただき光栄に思います。今年の西医体では昨年より順位を一つ落としてしまいましたが、自分の最善を尽くすことができました。応援してくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。来年の西医体に向けてさらに精進してまいります。



ゴルフ部（全医体団体優勝）

主将 竹 林 瑚乃香（医学科3年）

この度は青藍会スポーツ奨励賞という名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。日頃よりご支援くださる先生方、OB・OGの皆様にご心より感謝申し上げます。今後も感謝の気持ちを忘れず、ゴルフ部主将として部の発展に尽力してまいります。

ゴルフ部（全医体個人優勝・西医体個人優勝）

森 田 彩 夏（医学科4年）

この度は青藍会スポーツ奨励賞をいただき、ありがとうございます。今年初開催となった全医体ゴルフ部門で個人・団体ともに優勝できたことを大変誇りに思います。今後も部員一同、より精進してまいります。



陸上競技部（西医体400m 1位・200m 1位・100m 2位）

松 岡 久碧子（医学科6年）

この度は、名誉ある賞をいただき、ありがとうございます。昨年度に続き、200mと400mで2冠・2連覇を達成できたことをとても嬉しく思います。

達成できた目標、出来なかった目標様々ですが、大学陸上を通して得たことを、来年度からの社会人陸上に活かして行ければと思っています。

陸上競技部（全獣医走幅跳個人優勝）

山 本 大 心（医学科4年）

この度は、青藍会スポーツ奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。

今回の結果は決して一人では成し得たものではなく、仲間や支えてくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

長年の目標である走幅跳7m、100m10秒台の達成を目指し、今後も一層精進してまいります。



徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
大 藤 純（医学部43期）

青藍会の皆様には、日頃多くの研修医の受け入れやご指導頂き、また卒後臨床研修センターにご支援を賜り、敬意と共にお礼を申し上げます。

卒後臨床研修センター長として運営に携わるようになり、およそ2年が経過いたしました。徳島大学の初期研修プログラムでは、大学病院ならではの高度医療を体験できるほか、県内外の研修病院や地域の診療所と連携し、初期研修に必要な症候や経験すべき症例に応じた研修施設を自由に選択できるオーダーメイド研修が特徴となっております。先日の徳島県地域医療総合対策協議会にて承認いただきました通り、新たに近森病院、堺平成病院、平成横浜病院が協力型臨床研修病院として加わることになりました。初期研修医にとって研修先の選択肢が増えることで、より充実した研修プログラムとなることが期待されます。その他、卒後センタースタッフによる研修スケジュールや進捗状況、体調面への配慮など、きめ細かいフォローアップ体制が充実し、非常に恵まれた研修環境を作り出しております。徳島大学病院の研修医は、県内外の協力施設の先生方のご指導を賜りながら充実した研修ができており、スタッフ一同誇りに思っております。

さて、2026年度も初期研修医の修了式を迎え、医科6名、歯科28名の研修医が無事当院研修プログラムを修了いたしました。修了式では、徳島大学病院長である西良教授からのメッセージとして、徳島大学病院には国内・外でも有数の優れたドクターが多数在籍し、どこで研修を受けたのか？と共に、誰に研修を受けたのか？が重要である、というお言葉が大変印象に残りました。研修医が研修先を選ぶ段階において、都市圏で症例数が多い、あるいは給与を含めた待遇面などの表面的な指標がどうしても重視される中で、実際に徳島大学病院の研修プログラムを通じて出会った名医や指導医、そして徳島大学病院ならではの豊富な臨床経験は、今年修了した研修医にとってかけがえのない財産となったのではないのでしょうか。

最後に、徳島県全体で研修医を育てるという共通した認識のもとに、日々研修医指導の労を担っていただいております指導医の皆様は心より感謝申し上げます。良い臨床研修の実現には、どれだけ指導医が真剣に教えるか、研修医に体験させてあげたいという熱意を持てるかが重要であることは言うまでもありません。ただ、もう一つ必要なこととして、研修医自らがどれだけ意欲をもって研修に臨めるか、準備を怠らず責任をもって臨床現場に入っていけるか、ということが挙げられます。常に感性を研ぎ澄まし、少しでも多くのことを学ぼうとする姿勢を持った研修医は、この2年間を見ても大きく成長しているように感じます。逆に、研修意欲に乏しく興味のある診療科でしか頑張れないようでは、たとえ専門研修に進んだ後にも苦勞するのではないかと感じることもあります。医学生や初期研修医は、売り手市場の原理が働き、常に勧誘ばかりされてきた立場ではないかと思えます。どのような能力の人材であっても、研修先での所属期間はせいぜい数か月、初期研修医だから出来ないのは当然と、暖かく見守ってこられたと思えます。ただ、これからの専門研修は違います。逆に評価される立場となります。一刻も早く、専門的な知識や技能を習得し、経験を積み、一人の医師として自らの能力を証明し続けなければなりません。徳島大学病院あるいは徳島県内の臨床研修病院を修了し、新たに専門研修に進む研修医全員が、今後、遭遇する様々な困難に打ち勝って、充実した専門研修を過ごしてほしいと心より願っております。

当センターでは、「徳島で、やろう！」をスローガンに、徳島県全体で医師を育てる ALL 徳島での研修を推進し、県内の若手医師育成と医療の質向上に寄与できるよう取り組んでおります。青藍会の皆様方には卒後臨床研修へのご理解と共に、ご指導・ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

青藍会賞募集

2026年度青藍会賞募集

2026年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために、若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1. 応募資格

2026年12月末現在で42才未満の青藍会正会員。なお、当該年齢に達する以前に産前産後の休暇取得または未就学児を養育していた場合は、その期間を加えた年齢未満とする。

但し、2026年12月末日までに青藍会会費を完納していること。

2. 審査対象

2022年1月から2026年12月までの研究業績を対象とします。

なお、選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3. 応募締切

2027年1月12日（火）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4. 応募手続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（原本とそのコピー 10部をご用意下さい）

1. 申請書（別紙様式1）
2. 履歴書（略歴）（別紙様式2）
3. 主指導者の推薦状（別紙様式3）
4. 原著論文（2022年1月～2026年12月末に発刊された原著論文；通し番号をつけ、年代の近い順に記載し、主たる論文3編には通し番号に○をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式4）
5. 主たる論文3編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式5）
6. 主たる論文3編の別刷り（コピー可）
7. 競争的資金の獲得状況（2019年1月～2026年12月末までに獲得した研究費の名称、研究期間、研究題目、直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2026年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式6）
8. 今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式7）

なお、同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5. 選考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6. 受賞者数

原則一名

7. 青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8. 受賞講演

青藍会総会開催日当日、受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先 青藍会事務局 TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

医学科学生（総代副総代）との懇談会を開催しました

学生会員と直接話し合う場を持ちたいと2023年に初めて懇談の場を設け、学生からの意見・要望を直接聞く意見交換を行いました。今後も継続すべきとのことで、12月10日（木）に3回目の懇談会を開催しました。今回も、各学年総代・副総代にお声掛けし、青藍会正副会長、医学部長、医学科長及び学務課（陪席）にもご参加いただき、大串文隆青藍会会長、橋本一郎医学部長の挨拶の後、学生会員から感想や意見が次々と出され、有意義な時間となりました。

青藍会の懇談会に参加して

榎 本 侑 生（医学科6年総代）

この度は、懇談会という貴重な機会を設けていただき、ありがとうございました。

日頃から私たちを支えてくださっている先輩方の存在を身近に感じることができ、心より感謝しております。

今後とも先輩方のご活躍に追いつけるよう誠心誠意努力してまいりますので、引き続き温かいご指導・ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

石 田 紘 基（医学科6年副総代）

昨年に引き続き懇親会の開催誠にありがとうございました。今年の懇親会も和やかな雰囲気の中様々な意見が活発に飛び交い、後輩たちの学生生活をより充実させるために有意義な時間になりました。

今年で我々6年生は卒業となりますが、今後とも青藍会の皆様とは引き続き仲良くさせていただきたいと思います。また、今後は我々も現役学生たちを支える側として活動できることを嬉しく思います。

鍛 冶 尚 紀（医学科5年総代）

この度はお忙しい中、懇談会という貴重な機会を設けていただき誠にありがとうございました。懇談会では終始和やかな雰囲気の中、先生方に質問や要望を伝えさせていただくことができました。

加えて、青藍会の方々が我々の学校生活にどのようなサポートをしてくださっているかを再認識することができました。また次回、開催していただける事を楽しみにさせていただいております。

松 本 り か（医学科5年副総代）

今年も貴重なお時間をありがとうございました。いつもこの会を通して、青藍会の先生方が学生を思ってくださっていることを実感します。今後も青藍会の一員として精進してまいりますので、あたたかく見守っていただけると幸いです。

森 田 彩 夏（医学科4年総代）

懇談会という貴重な機会を設けてくださり、ありがとうございました。私たちの意見や要望に対し、先生方が熱心に耳を傾け、前向きに検討して下さったことがとても嬉しかったです。青藍会の心強い支援を糧に、今後もより一層努力していきます。

石 田 祐 也（医学科4年副総代）

昨年に引き続き懇談会を開催していただき、ありがとうございました。学生の些細な声にも真摯に向き合ってくださり、日々の学びが先生方や職員の皆様に支えられていることを改めて実感しました。微力ながら医学科の発展に貢献できるよう、私も尽力してまいります。

松 田 奈々子（医学科3年総代）

この度は貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。日頃より多方面でご支援いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。今後も一層精進して参りますので、引き続きよろしくお願い致します。

前 場 圭 子（医学科3年副総代）

この度は青藍会の懇談会に参加させて頂くという貴重な機会を頂き有難うございました。私たち医学科生が青藍会の先生方に支えられていることを感じ大変ありがたくまた嬉しく思います。先輩方に支えられていることに感謝し、今後も励んでいきたいと思っています。

男 澤 優 花（医学科1年総代）

この度は、青藍会の皆様との懇談会という貴重な機会を設けていただき、誠にありがとうございました。学生の意見に親身に耳を傾けてくださる先輩方のお姿から、私たち学生が常に温かく支えられていることを実感しました。

まだ未熟ではありますが、この恵まれた環境への感謝を忘れず、少しでもご期待に応えられるよう、日々研鑽を重ねていきたいと思っています。

岩 津 可 琳（医学科1年副総代）

今回は、青藍会の方々や、先輩方との懇談会という貴重な機会をくださり、ありがとうございました。青藍会の方々や、先輩方が、徳島大学と学生のために、意見を出し合い交流し合う姿を見て、とても心強く感じました。



新 入 生 歓 迎 会

日時：令和8年4月6日（月）13：00～13：30
場所：基礎第一講義室

眉山の桜も満開に咲き誇る中、青藍会主催の新生歓迎会が開催された。新入生111名（男子：51名、女子：60名）はアスティとくしまで挙行された令和8年度徳島大学入学式の後、晴れやかな表情で会場に到着した。青藍会米崎正則事務長の司会のもと、大串文隆青藍会会長の祝辞に続き沼田周助先生、坂東良美先生より先輩からの歓迎の言葉が述べられた。会は始終穏やかな中、盛会裡のうちに終了した。



令和8年度新入生への祝辞

新入生歓迎の言葉

青藍会会長

大 串 文 隆（医学部24期）

皆さんこんにちは、ただいま紹介いただきました青藍会会長の大串です。青藍会を代表して一言お祝いを申し上げたいと思います。

新入生の皆様この度は徳島大学医学部医学科へのご入学おめでとうございます。これまでの努力が実って難関を乗り越え夢を叶えられた皆様に心よりお祝い申し上げます。

私は50年以上前の1972年に入学しました。当時はまだ、校内は建物も少なく敷地の奥には兵舎が残っており、学生寮や部室などに使われておりました。当時、医学部の最初2年間は医学進学過程となっており常三島キャンパスで一般教養の授業があり、3年から蔵本キャンパスで医学の講義を受けるようになりました。私は卒業後旧第三内科（現呼吸器膠原病内科）に入局して専門病院での研修、基礎研究等を経験した後大学で教官を10数年務め、2000年から高知の国立病院に入職し20年勤務しました。退職後徳島に帰り、現在の慢性期病院で地域医療を実践しております。

皆さんが入学された徳島大学医学部医学科は昭

和18年に徳島県立徳島医学専門学校として設立され、昭和24年5月に学芸学部、工学部、医学部の3学部を有する国立徳島大学が設置され、徳島大学医学部として1973年に愛媛に医学部ができるまで四国唯一の国立大学医学部でした。80年以上の歴史を持つ古い医学部です。この間徳島大学は臨床医、研究者、行政官など多く優秀な人材を輩出してきました。また、四国で1校でしたので各県の基幹病院には多くの卒業生が派遣され地域の高度医療を支えてきました。また、退職後もそこに残り診療所を開設し地域医療に貢献している卒業生もたくさんおられます。海外でご活躍の先生方もおられます。皆さん方にはこの大学の歴史に誇りを持っていただきたいと思います。



書籍紹介



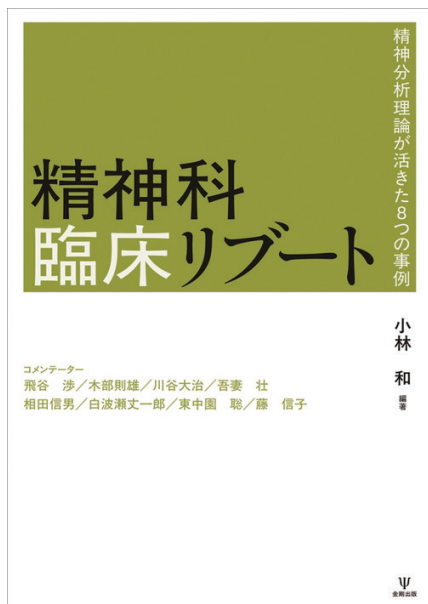
このコーナーでは、正会員、名誉会員及び学内関係者の著書を紹介することとしています。専門家向けの書籍および一般向けの書籍を紹介していきたいと考えています。自薦、他薦どちらでも結構です。青藍会事務局までお送り下さい。なお、掲載については広報委員会にご一任下さい。



精神科臨床リポート 精神分析理論が活かした8つの事例

(発売元 金剛出版 2025年9月30日)

編著 小林 和 (医学部12期)



第12期生の私たちのことを、華の41と言った。昭和41年卒で、学部3年生の頃に始まった学園紛争が全国に拡がって、全国の医学部卒業生約3,000人が一斉に春の医師国家試験をボイコットしたからだった。これがきっかけで、問題を孕んでいたインターン制度と、その後に数年間続いていた無給医という悪しき習わしは見直され、現在の研修医制度になった。その頃、児童青年精神科という分野が始まり、黒丸正四郎教授(神戸)と堀要教授(名古屋)の二人が国内大学での専門家だったので、近くの神戸大学にやってきて今日を迎えた。

国試ボイコットにまで至った学園紛争は学会紛争へと展開し、折しも発刊された「白い巨塔」は、医局講座制改革に拍車をかけた。精神科では特に「ルポ・精神病棟」が暴いた、患者の人権問題へと深刻さを増して日本精神神経学会は根底からの見直しを迫られる数年間となっていた。こうした歴史とともに私の精神科臨床は進んだ。自ら、教科書通りに実践していただいい、先輩医師の指導を仰いで従っていただいい、とはいかなかった。目の前の患者さんを観察することが第一で、そして書物にある事々と、何がどう符合し、どう符合しないの

かを見極めることから始めた。黒丸教授指導の第一は「一日の何時間かを病棟に入って、患者の傍らで過ごさない」だったことも後押しした。そして、多くのことを観て体験した。『違いに気づけば、確かに「見えている」のだが、気づかなければ、差異があっても「見えない」。一旦違いが見えたら、次はその評価である。』という、養老孟司の言葉(「意識の在り方」, 精神療法, Vol. 49, No.5, 2023, 金剛出版)が、響く。病棟に入って次々に見たことが私の精神科臨床を支え続けた。

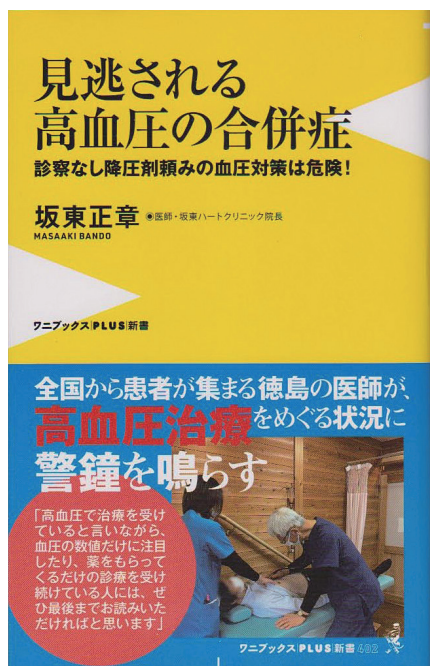
学部卒業の頃、医師の仕事とは、診断して、その後は薬物の何かを投与するとか、手術とか、放射線照射など、物的な何かを投与することと認識していた。そんな新米医師の私の前に、ひとしきり訴えて、診断と治療を考えあぐねている私に「薬は要らない」といい、しかし治療を求めてやってくる青年がいた。そして、精神分析の道に入ってきた。話を聴くこと、物事を観ること、その尽きない奥深さを知ったのだ。この醍醐味を一人でも多くの方に伝えたい。特に、精神科臨床の関連分野に関わる仲間には、熟達してほしい。精神分析理論が支えるちょっとしたコツが解ると、患者の語りに耳を傾ける仕事が楽しくなる。すると、患者の心が開くのだ。その50年の臨床を、こんな立派な一冊にまとめる機会が思いがけず巡ってきた。

そうした8つの事例集で、話し言葉なので、物語風に読める。コ・ワーカーを含めた精神科医療関係者はもとより、そうではない他科の医療関係者をも含む一般の方々にも、話を聴く意義とコツがわかる。

見逃される高血圧の合併症

(発売元 株式会社ワニブックス 2024年2月5日発行)

著者 坂 東 正 章 (医学部25期)



当院は新患、再来とも予約制だが、あるとき70代男性が飛び込み受診した。看護師の問診では、65歳から高血圧と診断され、かかりつけ医で投薬を受けているも4～5日前から夜間就寝中に息苦しく、動悸もあって不安だと訴えた。強い症状のある飛び込み受診者は拒否することはできずそのまま診察した。外来血圧は120/64mmHg 脈拍数は100前後で不整 SPO2 93～94% 体重79.7kg。理学的所見では両側上眼瞼に浮腫があり、聴診では胸側右縁第二肋間から胸骨左縁第四肋間にかけて強い駆出性収縮期雑音を聴取。両側肺に水泡音があり、腹部の触診では腹水貯留が疑われ、両側下腿には強い浮腫があった。安静時心電図では頻脈性心房細動があり、胸部レントゲン写真では両側胸水貯留を認めた。心房細動、大動脈弁膜症によるうっ血性心不全と診断し、直ちに急性期病院に救急搬送した。幸い無事退院し、退院時の体重は71.2kgだった。この患者さんは長年かかりつけ医院で投薬を受けるも、自覚症状が何もないため診察は受けずに薬をもらって帰ることが多く、たまに診察室に入っても世間話をするだけだったと。

このように降圧剤を服用していても自覚症状がなければ順調で問題はないと誤解している人をよく見かける。しかし高血圧の経過中に症状が生ずればかなり危険な状態であることが多く、自覚症状がなければ

順調と考えてはならない。定期的に医師の診察を受けるようにと患者さんには伝えている。当院の患者さんは2～3ヵ月間隔で受診する事が多い。このため私自身も高血圧合併症を見逃さぬよう、毎回の診察時に視診、聴診、触診で患者さんの全体像を確認している。前回まで何もなかったのに受診時に心房細動を認める患者さんが毎年数名存在する。高齢者の心房細動症例では自覚症状が何もないことが多く、診察しなければ見逃してしまう。ただちに抗凝固療法を開始し、後日薬剤的除細動も追加。ケースによっては心房細動へのアブレーションの有益性を説明し、急性期病院に紹介している。また多発する心室性期外収縮を認めても自覚症状が全くない患者さんもあり、ホルター心電図で一定割合以上の出現率があれば薬剤投与を開始している。

頸部の聴診で血管雑音を聴取し、頸動脈エコー検査で狭窄の経過観察を行い、急性期病院に紹介してステント内挿術を受けた方も数名いる。腹部の触診で腹部動脈瘤を認めることもあり、下腹部の触診で腸骨動脈瘤に気づくこともあった。それぞれ急性期病院に紹介して開腹下の外科治療やステント内挿術を受けた。高齢者の下肢閉塞性動脈硬化症を見逃さないために、初診時及び70歳以上の方の誕生日月には両側足背動脈拍動の有無を確認している。医師が診察することで確認される高血圧の合併症には種々のものがあり、それを見逃さないようにするため、毎回の受診時に身体全体を診察し、定期的に諸検査を施行している。

厚生労働省はオンライン診療を推奨しており、それを受けてネット上にはオンライン診療を勧めるクリニックの宣伝がみられる。通院する必要はなく、薬も配達すると謳っている。しかしオンラインで医師と面談するだけでは、高血圧合併症を見逃してしまうことがあり、それを一般の人々に知ってほしいと思い、2024年2月に「見逃される高血圧の合併症」(ワニブックス PLUS 新書)という書籍を出版した。患者さん向けの書籍だが、高血圧診療を行っている医師からも参考になったとの連絡をいただくことがある。会員の先生方にもお読みいただければ幸いだ。

徳島大学の動き

徳島大学大学院医歯薬学研究部長就任挨拶

大学院医歯薬学研究部長に就任して

大学院医歯薬学研究部長

西岡 安彦（医学部34期）



令和8（2026）年4月より大学院医歯薬学研究部長を拝命いたしました呼吸器・膠原病内科学分野の西岡安彦と申します。

大学院医歯薬学研究部は、徳島大学蔵本地区の医学・歯学・薬学・栄養学・保健学の3学部6学科と大学院5研究科を束ねる教員組織です。平成16（2004）年4月に医学・歯学・薬学・栄養学の大学院4研究科を統合した教員組織の「ヘルスバイオサイエンス研究部」として発足いたしました。平成18（2006）年に保健学が加わり医療系5大学院研究科の組織へと発展するとともに、平成27（2015）年4月から「医歯薬学研究部」に名称変更がなされました。平成29（2017）年からガバナンス改革の一環として、人事と研究を所掌する組織となりましたが、継続して学部・研究科の枠組みを越えた組織・領域横断的な多彩な研究・教育活動に取り組んでいます。

令和2（2020）年4月に「医歯薬学共同利用棟」が、令和5（2023）年には「医歯薬学共創プラザ」が完成し、医歯薬学研究部の活動を可視化できる施設が整備されました。特に「医歯薬学共創プラザ」は、西日本有数の規模を誇るスキルス・ラボや機能強化・拡充されたクリニカル・アナトミーラボ、看護リカレント教育センター、AIセンター、PCセンター、国際交流スペースなど、これまで医歯薬学研究部が取り組んできた活動を一気に集約し、さらに大きく発展させていく拠点に相応しい充実した設備です。今まさに学部・研究科の枠組みを越えた組織・領域横断的な研究・教育の活性化に取り組む環境が整ったと言えます。

医歯薬学研究部憲章には、医歯薬学研究部は健康生命科学を基盤に医学・歯学・薬学・栄養学・保健学の多様性と融合性を持つ統合大学院と謳われています。「医療教育開発センター」による「大学院教育クラスター」や「Tokushima Bioscience Retreat」を筆頭に、「宇宙医学・栄養学研究センター」、「看護リカレント教育センター」、「DDS研究センター」、「モンゴル国立医科大学とのJICA 日本モンゴル病院プロジェクト」など、組織・領域横断的な個性豊かな取り組みを進めています。

徳島大学は令和6年度に文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択され、研究大学として新たな歩みを始めています。医歯薬学研究部は社会産業理工学研究部とともに徳島大学の研究の両輪として本学の研究大学としての発展を牽引していく所存です。

青藍会の先生方のご支援、ご協力を何卒よろしくお願いいたします。

米村重信

私が良い医者を育てるためにできたことは非常にわずかなことかもしれませんが、毎年の新入生、そして国試に合格して研修場所に旅立つ卒業生を何度も見ることができたのは、私の中でもとてもうれしいことでした。これまでのご厚情に深く感謝いたします。

赤池雅中（医学部31期）

卒業時には想像もしていなかった多くのことを経験する機会をいただき、初代医学部長・学長であった中田篤郎先生の書に記された「学者如登山」というお言葉が心に深く響きます。これまでに出会ったすべての方々に感謝申し上げますとともに、青藍会の益々のご発展を心より祈念いたします。

退職のご挨拶

消化器内科学分野

高山 哲 治

2007年12月から2026年3月までの18年余り、消化器内科学分野の教授を務めさせていただきました。北海道生まれ、北海道育ちの私が地縁のない徳島の地に単身で着任し、当初は戸惑うことも多くございましたが、皆様の温かいご支援のおかげで、最後まで職務に全力で取り組むことができました。ここに改めまして、皆様のご厚情に心より御礼申し上げます。

大学の主要な役割は、研究・診療・教育の三本柱であると言われております。私は研究を軸としながら診療と教育にも力を注ぎ、とりわけ研究と診療の両立に努めてまいりました。教室員には、日常診療の中で生じた疑問（Clinical Question）を出発点とし、その解決のために臨床検体を用いた実験を行い、基礎研究によって理論を構築し、さらに臨床試験によって検証するという一連の流れを繰り返し指導してまいりました。また、多くの教室員が海外留学や国内留学を経験し、世界水準の研究および臨床を学ぶ機会を得ることができたと考えております。

地方大学においては、人材流出に伴う人手不足という課題を抱えがちですが、そのような状況下にあっても、高い水準の研究と診療が求められます。今後とも徳島大学がますます発展されますことを心より祈念申し上げます。





徳島大学大学院医歯薬学研究部
生理学分野教授

吉 田 盛 史（よしだ たかし）

略 歴

平成13年 3 月	京都大学理学部卒業
平成15年 3 月	京都大学大学院理学研究科修士課程修了
平成18年 3 月	京都大学大学院理学研究科博士課程修了
平成18年 4 月	京都大学大学院理学研究科博士研究員
平成19年 4 月	ブランダイス大学心理学部博士研究員
平成23年 2 月	九州大学大学院医学研究院特任助教
平成28年 4 月	東京大学大学院医学系研究科特任助教
平成28年 7 月	東京大学大学院医学系研究科助教
令和 3 年 6 月	東京大学大学院医学系研究科講師
令和 7 年11月	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授 (現在に至る)

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部・生理学分野

教授 吉 田 盛 史

令和 7 年11月 1 日付けで徳島大学大学院医歯薬学研究部生理学分野の教授を拝命いたしました吉田盛史と申します。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成13年京都大学理学部を卒業し、同大学院で博士号を取得しました。その後、米国ブランダイス大学心理学部、九州大学大学院医学研究院、東京大学大学院医学系研究科にて、大脳皮質での感覚情報処理の解明に取り組んでまいりました。今後は視覚をはじめとした感覚情報処理を対象に、脳活動計測、機械学習（AI）によるデータ解析を融合させ、脳の作動原理の解明を目指します。また、講義や研究教育を通じて、リサーチマインドを持った医師・医学研究者を育成するとともに、本学の発展に貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に、青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学病院新任教授紹介



徳島大学病院
地域外科診療部特任教授

徳 永 卓 哉（とくなが たくや）

略 歴

平成16年 3 月	昭和大学医学部医学科卒業
平成16年 4 月	徳島市民病院初期臨床研修医
平成18年 4 月	徳島大学医学部・歯学部附属病院医員（消化器外科）
平成20年 4 月	徳島県立中央病院非常勤嘱託医（外科）
平成21年 4 月	兵庫県立淡路病院医長（外科）
平成23年 4 月	徳島市民病院医長（外科）
平成25年 4 月	徳島大学病院地域外科診療部特任助教
平成29年 4 月	徳島大学病院消化器・移植外科助教
令和 3 年 4 月	徳島大学病院地域外科診療部特任准教授
令和 6 年 4 月	徳島大学病院地域外科診療部特任教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学病院地域外科診療部

特任教授 徳 永 卓 哉

令和 6 年 4 月 1 日付で徳島大学病院地域外科診療部の特任教授を拝命いたしました。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成16年に昭和大学を卒業後すぐに地元徳島に戻り、徳島大学消化器・移植外科（当時の第一外科）に入局いたしました。以後、関連病院にて研鑽を積み、平成25年から地域外科診療部の特任助教として主に徳島県西部の県立三好病院で勤務し、地域病院での腹腔鏡手術の導入、外科医療の均てん化、安定した救急医療の提供に努めて参りました。令和 3 年からは特任准教授として大学病院の医局と三好病院をインターネット回線で接続し、リアルタイムに遠隔手術指導ができるシステムを導入いたしました。現在三好病院には多くの特別地域枠の研修医が在籍しておりますが、直接の手術指導に加え、遠隔手術指導システムを活用することで魅力ある研修システムの構築に取り組んでおります。今後も、未来の消化器外科を担う人材の育成に尽力してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

第59回全日本医科学生 体育大会王座決定戦の結果

○ゴルフ部 女子団体 優勝

第59回全日本医科学生体育大会 団体優勝を振り返って

徳島大学医学部ゴルフ部主将

竹 林 瑚乃香（医学科4年）

この度、第59回全日本医科学生体育大会王座決定戦において、徳島大学医学部ゴルフ部が悲願の団体優勝を果たすことができました。日頃より多大なるご支援をいただいております青藍会の先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

今大会を振り返ると、何よりも部員一人ひとりが自分の役割をしっかりと果たしてくれたことが印象に残っています。特に、幼少期から研鑽を積んできた実力ある選手の実力は非常に大きく、その安定したプレーはチーム全体に大きな安心感と勇気を与えてくれました。そんな頼もしいエースの活躍に刺激

を受け、他の部員たちも「自分たちも一打でも力になりたい」と、一丸となってコースに立ち向かいました。過度な緊張感に飲まれることなく、最後まで徳島大学らしい、明るく前向きな雰囲気プレーを続けられたことが、今回の団体優勝という最高の結果に繋がったのだと感じています。

私自身、主将として至らない点多々ありましたが、そんな私を支え、最後まで一緒に戦ってくれた最高の部員たちには感謝の言葉しかありません。今回の優勝は、私たち現役部員の力だけでなく、これまで部を築き上げてこられた先輩方の伝統と、温かいご声援があったからこそ成し遂げられたものです。

この結果に満足することなく、来年度もこの素晴らしいチームワークを大切にしながら、部員一同より一層精進してまいります。今後とも、変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



徳島大学大学院医学研究科 MD-PhD コース修了

MD-PhD コースを修了して

立 花 尚太郎（医学科5年）

私は2023年4月から2026年3月までの3年間、疾患病理学分野で研究に取り組んで参りました。この度常山教授、小川准教授、清水准教授をはじめとした多くの先生方の手厚いご指導により無事にMD-PhD コースを修了し、医学科5年に復学することになりましたので、この場をお借りして御礼と感想等を申し上げたいと思います。

私が所属してきた疾患病理学分野はがんを始めとして、アレルギーや肝疾患など様々な領域の研究が行われています。扱う研究材料も多様で、培養細胞から動物個体、ヒト検体におよび、基礎研究だけでなく臨床への橋渡しとなる研究が行われています。私は四国研究医枠の一期生として本学に入学し、将来は臨床と研究の両立を目指す医師になりたいという思いを当初から抱いていました。学部学生の時点でStudent Lab や研究室配属を通じて疾患病理学分野に所属し、気管支喘息をテーマに研究者としての基礎的な手技やデータ解析について学び、基礎研究の重要性和面白さを実感しました。一方で学部3年次の研究室配属では新型コロナウイルスの流行により、実際に手を動かして研究をすることが満足に出来ませんでした。この心残りから、改めて腰を据えて研究に取り組みたいという思いが大きくなり、MD-PhD コースへの進学を決意しました。

MD-PhD コースでの3年間は、私にとって研究の難しさと同時に、その意義を深く考える時間となりました。実験計画の立案から実施、結果の解析に至るまで、想定どおりに進むことは少なく、試行錯誤を繰り返す日々でした。期待していた結果が得られず、研究の方向性そのものを見直さなければならない場面や、自身の仮説の甘さを痛感することもありました。そのような中で、指導教員の先生方からは、結果の良し悪しだけでなく、研究に向き合う姿勢や思考の過程の重要性について、丁寧かつ根気強いご指導をいただきました。

また、この3年間で多くの国内学会、国際学会に参加させていただきました。

他の研究者からのフィードバックを通じて、同じデータであっても立場や視点によって解釈が大きく異なることを学びました。自分では気付かなかった問題点や新たな可能性を指摘していただくことで、研究を一段深いレベルで捉え直す機会を数多く得ることができました。自ら課題を設定し、仮説を立て、それを検証し、得られた結果の意義を言語化する一連の過程は、研究者としての基礎を養うと同時に、論理的に物事を考える力や、困難な状況でも粘り強く取り組む姿勢を身につける貴重な経験であったと感じています。これらの経験は、将来臨床医として診療に携わる際にも、患者一人ひとりの背景を多角的に捉え、根拠に基づいて判断する上で大きな支えになると考えています。

今後は医学科に復学し、臨床医学の修得に一層励むとともに、本コースで培った研究的視点を常に意識しながら診療に取り組んでいきたいと考えています。将来的には、臨床の現場で生じた疑問を研究へと発展させ、その成果を再び医療へ還元できる医師・研究者となることを目指してまいります。最後になりましたが、MD-PhD コースにおいて貴重な学びの機会を与えてくださったすべての先生方ならびに関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



アレルギー学会 京都にて

徳島大学 MD-PhD コース同窓会活動報告

徳島大学 MD-PhD コース同窓会設立10周年記念会開催のご報告

荻野 広和 (医学部56期)

MD-PhD コース 3 期生で徳島大学病院呼吸器・膠原病内科の荻野広和と申します。青藍会の皆様方には、平素より本コース発展のためにご支援を賜っておりますこと、心より御礼申し上げます。

去る2026年2月28日(土)に、MD-PhD コース同窓会設立10周年記念会をパークウエストンにて開催いたしましたので、ご報告申し上げます。

本学の MD-PhD コースは2003年に開設され、これまでの23年間に計23名が進学しました。MD-PhD コース同窓会は、1 期生である石澤有紀先生のリーダーシップのもと2016年2月に設立され、本年節目の10周年を迎えました。また、石澤有紀先生が2025年4月より四国大学生生活科学部の教授に就任されたこともあり、このたび徳島大学 MD-PhD コース同窓会設立10周年記念会兼石澤有紀先生教授就任祝賀会を開催いたしました。

当日は、青藍会会長の大申文隆先生、医学部長の橋本一郎先生、医歯薬学研究部長の赤池雅史先生、石澤有紀先生の恩師のお一人である奈良県立医科大学薬理学教室教授の吉栖正典先生をはじめ8名の先生方、同窓生12名、そして四国研究医学生12名の計32名にご出席いただき、まず記念講演会を開催しました。冒頭に荻野より MD-PhD コースの現況についてご報告させていただいた後、三橋惇志先生(MD-PhD コース9 期生)、黒川憲先生(同7 期生)、そして石澤有紀先生の3 名の同窓生より、MD-PhD コース進学の間緯やその後のキャリア形成、ならびに現況についてご講演いただきました。研究医の多様性、あるいは MD-PhD コースの意義について改めて考える、とても良い機会となりました。

その後、記念撮影を行ったのち、祝賀会を開催しました。冒頭、1 期生である川添僚也先生よりご挨拶をいただいた後、橋本一郎先生、大申文隆先生よりご祝辞を賜りました。そして、赤池雅史先生の乾杯のご発声により祝宴が始まりました。和やかな雰囲気のもと、世代を超えた有意義な意見交換を行うことができました。祝賀会の途中では、当日ご出席がかなわなかった先生方からいただいたメッセージをビデオ形式で上映させていただき、多くの

先生方に見守っていただいていることを改めて感じました。その後、同窓生一人一人より近況報告を行い、吉栖正典先生から石澤有紀先生に向けてご祝辞をいただきました。最後に、福井清先生より閉会のご挨拶をいただき、お開きとなりました。

本学の MD-PhD コースは上述の通りここまで継続的に進学者を確保できておりますが、これは MD-PhD コースが設置されている我が国の医学部を見渡しても類を見ないものです。これまでご指導くださった先生方の熱意、また経済面を含め多方面にわたり温かくサポートしてくださった青藍会の皆様のご支援の賜物であり、改めて心より御礼申し上げます。また、今回の記念会開催にあたり、多くの先生方や同窓生より温かいご寄付をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。これまで頂戴した多くのご恩に報いるべく、同窓生一同力を合わせて頑張っていきたいと思っております。今後も本コースへの変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

MD-PhD コース同窓会 SNS アカウント

Instagram: https://www.instagram.com/tokushima_univ_mdphd_course/

Facebook: <https://www.facebook.com/tokushimaMDPhD/>

Instagram



Facebook



徳島大学医学部 MD-PhD コース同窓会
設立10周年記念会・石澤有紀先生教授就任祝賀会
令和8年2月28日 於パークウエストンホテル

青藍会学生広報委員紹介

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

直 江 陽 香（医学科3年）



今年度、青藍会学生広報委員を務めさせていただくことになりました、医学科3年の直江陽香と申します。つい先日入学したばかりのように感じますが、気がつけば大学生活3年目を迎え、時の流れの早さを実感しております。2年次には、解剖学・生理学・生化学・免疫学・寄生虫学・細菌学・ウイルス学といった基礎医学分野を中心に、人体の正常な構造や機能について幅広く学びました。2年次は試験が多く大変な時期もありましたが、それらを通して基礎的な知識を確実に身につけることができたと感じております。3年次からは、病態や臨床との関連についての学びが本格化し、さらに研究室配属も始まるため、新たな学びを得ることができることを大変楽しみにしております。今後は、学生広報委員として日々の学生生活の様子や学びの実際を皆様に分かりやすくお伝えできるよう努めてまいります。至らぬ点もあるかと存じますが、何卒よろしくお願いいたします。

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

太 田 菜々香（医学科3年）



この度、学生だよりの企画を担当させていただきます、医学科3年の太田菜々香です。私が徳島大学に入学してから二年が経過し、三年目を迎えようとしている今、時の流れの速さを実感しています。二年次は特に試験が多くて苦労しましたが、優しい仲間を支えられながら乗り越えることができました。その過程で互いに助け合う大切さを実感し、絆もより一層深まったと感じます。二年次で一番印象に残っているのはやはり解剖実習です。実際に人体に触れながら、これまでの講義で学んだ知識を確かめながら理解を深めることができただけでなく、命の尊さや将来医療に携わる責任についても改めて考える機会にもなりました。厳しい実習を共にした仲間とは、今でも親しく交流しています。三年次では病理学や薬理学など、より専門的で医療に密着した科目を学びます、また研究実習が始まり、私は薬理学研究室に配属されます。新たな環境の中で専門的な知識を深め、主体的に動く姿勢を身に付け三年次も実りのある学年にしたいです。

青藍会の動き

青藍会出身教授一覧

(令和8年4月1日現在)

氏 名	期	大 学 名	講 座	氏 名	期	大 学 名	講 座
東 敬次郎	26	徳 島 文 理 大 学	看 護 学 科	友竹 正人	39	徳 島 大 学	メンタルヘルス支援学
長谷川好規	26	名古屋学芸大学	看 護 学 科	桑原 知巳	39	香 川 大 学	分 子 微 生 物 学
斧 康雄	27	帝京平成大学	健康メディカル学部	前川 洋一	39	岐 阜 大 学	寄 生 虫 学 ・ 感 染 学
下泉 秀夫	28	国際医療福祉大学	医 療 福 祉 学	奥村 裕司	39	相 模 女 子 大 学	健 康 栄 養 学 科
宇野 昌明	29	川崎医療福祉大学	総合教育センター	松浦 哲也	39	徳 島 大 学	リハビリテーション部
横越 浩	30	四 国 大 学	生 活 科 学 部	井崎ゆみ子	39	徳 島 大 学	キャンパスライフ健康支援センター 保 健 管 理 部 門
石堂 一巳	31	徳 島 文 理 大 学	健 康 科 学 研 究 所	大林 茂	39	埼 玉 医 科 大 学	リハビリテーション科
原田 雅史	32	徳 島 大 学	放 射 線 医 学	埴淵 昌毅	39	徳 島 大 学	地域呼吸器・血液・代謝内科学
高橋 吉孝	32	岡 山 県 立 大 学	栄 養 学 科	大塚 秀樹	40	徳 島 大 学	画 像 医 学 ・ 核 医 学
川人 宏次	32	自治医科大学	心 臓 血 管 外 科	山田 博胤	40	徳 島 大 学	地 域 循 環 器 内 科 学
楊河 宏章	32	徳 島 文 理 大 学	看 護 学 科	増野 智彦	40	日 本 体 育 大 学	救 急 医 療 学 科
阿部 孝典	32	高知学園大学	臨 床 検 査 学 科	和泉 唯信	41	徳 島 大 学	臨 床 神 経 科 学
吉栖 正典	33	奈良県立医科大学	薬 理 学	漆原 真樹	41	徳 島 大 学	小 児 科 学
二川 健	33	徳 島 大 学	生 体 栄 養 学	加地 剛	41	徳 島 大 学	ウイメンズヘルス支援学
浦上 淳	33	川 崎 医 科 大 学	総合医療センター外科	大日 輝記	42	香 川 大 学	皮 膚 科 学
坂東 良美	33	徳 島 大 学	病 理 診 断 科	滝沢 宏光	42	徳 島 大 学	胸部・内分泌・腫瘍外科学
山口 文徳	33	愛媛県立医療技術大学	臨 床 検 査 学 科	森 宏仁	42	愛 媛 大 学	先進消化器内視鏡開発学
久保 宜明	34	徳 島 大 学	皮 膚 科 学	大藤 純	43	徳 島 大 学	救急集中治療医学
西岡 安彦	34	徳 島 大 学	呼吸器・膠原病内科学	堤 保夫	43	広 島 大 学	麻 酔 蘇 生 学
西良 浩一	34	徳 島 大 学	運 動 機 能 外 科 学	酒井 紀典	43	徳 島 大 学	高度先進整形外科診療部
橋本 一郎	34	徳 島 大 学	形 成 外 科 学	池田 康将	43	徳 島 大 学	薬 理 学
志馬 伸朗	34	広 島 大 学	救急集中治療医学	北村 嘉章	43	徳 島 大 学	耳 鼻 咽 喉 科 学
篠原 勉	34	徳 島 大 学	地域呼吸器・総合内科学	酒井 陽子	43	徳 島 大 学	麻 酔 科 診 療 部
田中 克浩	34	川 崎 医 科 大 学	乳 腺 甲 状 腺 外 科	若田 好史	43	徳 島 大 学	病院情報センター
高橋 章	35	徳 島 大 学	予 防 環 境 栄 養 学	池本 哲也	44	徳 島 大 学	安 全 管 理 部
松田 純子	35	川 崎 医 科 大 学	病 態 代 謝 学	石川 正和	44	香 川 大 学	整 形 外 科 学
相澤 徹	35	高知学園大学	管 理 栄 養 学 科	伊藤 弘道	45	鳴 門 教 育 大 学	特 別 支 援 教 育
堀井 新	35	新 潟 大 学	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	森岡 久尚	45	徳 島 大 学	公 衆 衛 生 学
篠原 尚	35	兵庫医科大学	上 部 消 化 管 外 科	岡田 賢	45	広 島 大 学	小 児 科 学
早瀬 康信	35	徳 島 大 学	地 域 小 児 科 診 療 部	辻川 哲也	45	福 井 大 学	放 射 線 医 学
安友 康二	36	徳 島 大 学	生 体 防 御 医 学	須賀 健一	45	自治医科大学附属さいたま医療センター	周産期母子医療センター新生児部門
矢野 聖二	36	金 沢 大 学	呼 吸 器 内 科	松井 尚子	45	徳 島 大 学	臨 床 神 経 科 学
井原 義人	36	和歌山県立医科大学	生 化 学	沼田 周助	46	徳 島 大 学	精 神 医 学
田中 克哉	36	徳 島 大 学	麻 酔 ・ 疼 痛 治 療 医 学	近藤 俊輔	46	東京女子医科大学	腫 瘍 内 科
岩田 貴	36	徳 島 大 学	創 成 科 学 教 育	伊賀 淳一	46	愛 媛 大 学	精 神 神 経 科 学
上原 久典	36	徳 島 大 学	病 理 診 断 科	岸 誠司	46	高 知 大 学	内 分 泌 代 謝 ・ 腎 臓 内 科 学
岡本 康裕	36	鹿 児 島 大 学	小 児 科 学	島原 佑介	47	東京医科大学	心 臓 血 管 外 科
小山 文彦	37	東 邦 大 学	産業精神保健・職場復帰支援センター	岩佐 武	48	徳 島 大 学	産 科 婦 人 科 学
川人 伸次	37	徳 島 大 学	歯 科 麻 酔 学	中村 信元	48	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学
中村 教泰	38	山 口 大 学	器 官 解 剖 学	森垣 龍馬	49	徳 島 大 学	先端脳機能研究開発
遠藤 逸朗	38	徳 島 大 学	生 体 機 能 解 析 学	西 正暁	51	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学
添木 武	38	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学	梅原 英裕	52	徳 島 大 学	キャンパスライフ健康支援センター アクセシビリティ支援部門
上村 浩一	38	兵 庫 県 立 大 学	保 健 医 療 福 祉 系	石澤 有紀	54	四 国 大 学	生 活 科 学 部

※特任教授含む

教授にご就任された際には、青藍会事務局までお知らせいただけますれば幸甚に存じます。



高知学園大学
健康科学部臨床検査学科教授

阿 部 孝 典（あべ たかのり）

略 歴

昭和61年 5 月	徳島大学医学部小児科
昭和62年 3 月	社会保険 栗林病院小児科
平成元年 6 月	徳島大学医学部小児科
平成 2 年 6 月	徳島県立中央病院小児科
平成 3 年 6 月	公立学校共済 四国中央病院 小児科長
平成 4 年 6 月	阿南医師会中央病院 小児科長
平成 5 年 6 月	徳島大学医学部小児科
平成 8 年 4 月	高知赤十字病院 小児科副部長
平成13年 9 月	Department of Experimental Hematology, Medical University of South Carolina Postdoctoral Fellow（米サウスカロライナ医科大学血液内科 博士研究員）
平成15年 4 月	国立病院四国がんセンター 小児科長
平成16年 4 月	徳島赤十字病院小児科
平成17年 4 月	高知赤十字病院 小児科部長
平成21年 9 月～平成30年 3 月	高知大学医学部 臨床教授
平成30年 1 月	社会福祉法人恩賜財団 済生会今治病院 小児科部長
平成31年 2 月	医療法人 住友別子病院 小児科長
令和 6 年 4 月	高知市こども未来部 こども支援担当参事 高知市健康福祉部 健康推進担当参事
令和 6 年 4 月～	特定医療法人仁泉会 春野うらかクリニック小児科・内科
令和 8 年 4 月	高知学園大学健康科学部臨床検査学科 教授 （現在に至る）

御挨拶

高知学園大学健康科学部臨床検査学科

教授 阿 部 孝 典（医学部32期）

このたび令和 8 年 4 月 1 日付にて、高知学園大学健康科学部臨床検査学科の教授を拝命いたしました。青藍会の皆様方に、この場をお借りしてご報告申し上げます。

医療法人住友別子病院において新型コロナウイルス対応を含む診療業務に従事した後、令和 6 年 4 月より高知市こども未来部に入庁し、こども支援担当参事として、子育て支援、養育支援、虐待対応、ならびに教育委員会と連携した発達障害や不登校に関する啓発・講演活動に携わってまいりました。令和 8 年 3 月に高知市こども未来部を退職後、ご縁を賜り、現職に就任いたしました。

現在は、高知学園大学健康科学部臨床検査学科および管理栄養学科、ならびに高知学園短期大学看護学科において、臨床医学、臨床検査医学、病理学、地域医療およびチーム医療などの講義を担当しております。また、講義以外にも、勉学や生活に困難さを抱える学生に対し、カウンセリング等の支援を行っております。

今後はこれまでの臨床や行政での経験を生かし、大学と医療・行政との連携を一層推進していく所存です。さらに、学生指導を通じて、情熱と高い志を持ち臨床現場で活躍できる人材を、一人でも多く実社会へ送り出したいと考えております。

今後とも、御指導・御鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、寄稿者の氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル ○ ○ ○ ○ ○ ○ 山 田 太 郎 (医学部○期)
- 文字数は1,400字以内、写真（カラー）は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
(例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生)

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEG ファイル等でお送りください。
原稿（Word 等）に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかった場合は、届いていないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号108号の締め切り日は令和8年9月25日（金）です）

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。

締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。

第43回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ

第43回青藍会・医学科講演会を開催いたします。多数のご参加をお待ちしています。

日 時 令和8年10月21日(水) 18時30分～20時

場 所 徳島大学藤井節郎記念ホール(蔵本キャンパス)

座 長 沼田周助 先生(徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野教授)



やなぎさわ まさし
講 師 柳 沢 正 史 先生

筑波大学 国際統合睡眠医科学
研究機構 (WPI-IIIIS) 機構長・教授
(株)S' UIMIN 取締役会長

演 題 「睡眠の謎に挑む

～健やかな睡眠から始まるウェルネス～
(仮)

柳沢正史先生ご略歴

- 1985年 筑波大学医学専門学群卒業
- 1988年 筑波大学大学院医学研究科 博士課程修了(医学博士)
- 1989年 筑波大学基礎医学系薬理学 講師
- 1991年 京都大学医学部第一薬理学 講師
- 1991年 テキサス大学サウスウェスタン医学センター 准教授
兼 ハワードヒューズ医学研究所 准研究員
- 1996年 同大学 教授 兼 同研究所 研究員(2014年3月まで)
- 1998年 The Patrick E. Haggerty Distinguished Chair in Basic Biomedical Science, UTSW
- 2001年 ERATO「柳沢オーファン受容体プロジェクト」総括責任者(2007年3月まで)
- 2010年 内閣府 最先端研究開発支援プログラム(FIRST) 中心研究者(2014年3月まで)
筑波大学 教授兼任
- 2012年 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS) 機構長(現任)
- 2014年 テキサス大学サウスウェスタン医学センター 客員教授(現任)

【プロフィール】

1960年東京生まれ。筑波大学医学博士課程修了(MD/PhD), 医学博士。

1988年, 大学院在学中に, 強力な血管収縮作用を持つ新規生理活性ペプチド「エンドセリン」を, 1998年に睡眠・覚醒を制御する「オレキシン」を発見。これらの発見は, いずれも上市新薬の開発に直接結びついた。

31歳で渡米し, 24年間にわたりテキサス大学サウスウェスタン医学センター教授とハワードヒューズ医学研究所で研究室を主宰。2012年, 文部科学省世界トップレベル研究拠点プログラム国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)を設立。2017年, 睡眠から健康をつくることを目的に筑波大発のスタートアップベンチャー企業株式会社S' UIMINを起業し, 2022年より代表取締役。ポケモンスリープ監修。



最新の情報につきましては青藍会ホームページをご覧ください。

青藍会ホームページ

<https://www.seirankai-tokushima.jp/>

共催 青 藍 会
医 学 科

編集後記

2026年の前半、世界情勢は予測困難な展開を続け、社会全体が不安定さを増しています。日本においても、医療・経済・教育をはじめ幅広い分野で様々な対応が求められ、国民生活にも大きな影響が及んでいるのが現状です。

青藍会会報第107号をお読みいただき、誠にありがとうございます。今号も、多彩で充実した内容となりました。三上靖夫先生の学長就任、橋本一郎先生の学術集会大会長ご就任の紹介をはじめ、未来を担う新入生歓迎会の記事、各支部だより、会員通信など、青藍会の活動とつながりを感じていただける構成となっています。

また、私と同級生であり、長年ともに青藍会広報に携わってきた森口博基先生が、徳島大学医療情報部の発展に尽力された足跡もぜひご覧ください。さらに、我が国で患者数の多い高血圧に関する坂東正章先生の書籍紹介、新任・退任教授のご挨拶、医学生の実験、関連病院からの報告など、各分野から有益な情報が寄せられています。

我が国の歴史を振り返れば、いかなる時代の難局においても、人々は工夫と努力を重ね、互いの信頼を基盤とした協力によって乗り越えてきました。医学・医療の分野においても多くの課題が存在しますが、利他の精神を大切にしながら、調和と均衡のとれた解決策を模索していくことが重要であると感じます。

本会報が、会員相互の理解と交流を深め、公的な Welfare と一人ひとりの Well-being の向上につながる一助となれば幸いです。

板 東 浩（医学部27期）

編 集 広報委員 沼田 周助（46期） 大塚 秀樹（40期） 工藤美千代（33期） 田中 克哉（36期）
原田 和代（33期） 板東 浩（27期） 森岡 久尚（45期）
学生広報委員 太田菜々香（医学科3年） 直江 陽香（医学科3年）

非 売 品

青 藍 会 会 報 第 107 号

令和8年6月3日印刷
令和8年6月10日発行

発 行 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
電話 (088) 633-7109 (内線2601)
FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)
E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp
URL <https://www.seirankai-tokushima.jp/>
振替 01680-4-8671
ゆうちょ銀行 一六九店 (169)
当座 0008671 青藍会

発 行 者 青藍会会長 大 申 文 隆

印 刷 所 グランド印刷株式会社
徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448
